

体育授業における社会的行動目標の再解釈―「間身体性」の視点から―

洲戸裕香（兵庫教育大学）

1. 目的

本研究では、体育授業において社会的行動目標を達成するためには何が求められるのかを考察・検討することを目的とした。

2. 方法

上記の目的を達成するために、文献検討により研究を進めた。

- 1) これまで体育科において社会的行動目標はどう捉えられてきたのか、先行研究を概観した。
- 2) 学校体育の存在意義を「間身体性(石垣, 2020)」の視点から明らかにした石垣の身体教育の思想を把握した。
- 3) 体育授業における社会的行動目標の達成に向けて、「間身体性」の概念がどのように活かされるのか、体育授業として想起される具体的指導について提案を試みた。

3. 結果と考察

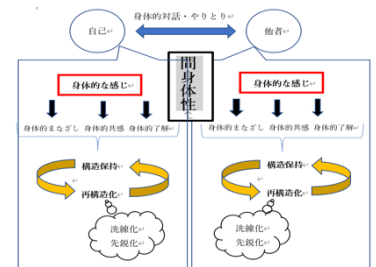
1) 社会的行動目標はどう捉えられてきたのか

体育科では社会的行動の育成が継続して主張されてきたが、その実現に向けた方法論の不十分さが指摘されるとともに、近年では責任学習モデル・協同学習モデルなどの具体的な学習方法について探求する取り組みが広がりを見せていた。その中でも今回注目したのは、大貫が1995年に「子どもの他者認識」という論稿で指摘したボール運動実践である。彼は、「お情けパス」と名付ける子ども同士の関わりでは問題の解決にはならないこと、さらに出来ない子だけに原因があるのではなく、出来る子にも問題があり、パス出しのタイミングやパスを受ける動きなどの「認識面」に着目していた。すなわち、「心的」な態度ではなく、動きの改善には「認識面」へのアプローチが不可欠であるとした。ただ他者を認識するということは、他者を考えた思考レベルに加えて、さらにもっと下の層すなわち身体層においても捉えるべきで

あると考え、その枠組みを石垣の体育思想に求めることにした。

2) 石垣の「間身体性」概念の理解

「間身体性」とは、(他者に対する認識の問題であり)、人間が人間として他の人間と繋がってられる根



源的な身体働きであった。石垣の考えを踏まえると、自己(私)や他者(相手)は、身体的に対話・やりとりをしながら、自己―他者ともに「身体的な感じ」をお互いに働かせている。また、その「身体的な感じ」には、「身体的なまなざし」「身体的共感」「身体的了解」が同時に稼働しながら働いており、さらにそれぞれがもつ構造を洗練化・先鋭化しながら再構造・構造保持をしていくサイクルを繰り返し「間身体性」としての構造が豊かにされていくことが理解された。

3) 「間身体性」から新たに見えてくる体育授業

大貫実践による認識面への着目に加えて、「間身体性」という発想で体育実践を捉え直した結果、相手の身体性を読むことが重要であり、できる・できないではなく、チームメイトがどんなボールを出しているのか、そのボールの勢いなどの「感じ」をつかむことを課題とすべきと考えた。したがって、常に自身の動きの感じを捉えようとする意識的な実践が、また他者の動きを観察する場合には自身が得ている「身体的な感じ」をもとにそれを分析する実践が求められる。さらに、集団種目では互いが間身体性を働かせることが不可欠であるが、その基盤として一人ひとりの「身体的な感じ」を育てておくことが不可欠である。今後は、そのような経験をどう提供し、どう指導していくか、具体的実践を積み重ねることが求められよう。